

のうふきん 納付金 〔国有資産等所在市町村交付金及び納付金に関する法律(昭和31法律第82号)〕に基づき、国鉄が国鉄所有資産の所在する市町村に納付する納付金の略称であって、実質的には応益課税である固定資産税と同様な性格のものである。

この法律は、昭和30年臨時税制調査会および地方制度調査会の答申に基づき、地方財政の窮乏打開と他の一般企業との均衡課税を目的に制定されたもので、国・地方公共団体の所有する固定資産に課するものを交付金といい、国鉄等公社に課するものを納付金という。

納付金は公社が公共性の強い事業であることからして一般の固定資産税の半額とし、昭和31年度から賦課されている。

国鉄においては、駅舎・線路設備・車両・船舶等直接事業の用に供している全資産の88%を占める資産が対象とされ、昭和39年度において約89億円を納付している。(庄野弘之)

のとせん 能登線 七尾線穴水駅から分岐して能登半島を能登湾に沿って北進、珠州市蛸島に至る営業キロ61.1kmの線。北陸線に属し線路等級は丙線である。

昭和34・6・15穴水・鶴川間、昭和35・4・17鶴川・宇出津間、昭和38・10・1鶴川・松波間開通、さらに昭和39・9・21松波・蛸島間が開通し全通した。この線は能登半島を日本海に沿って走り、観光的にもすぐれているが、能登半島の奥地開発に役だっている。なお松波・蛸島間については、その建設工事中昭和39・3・日本鉄道建設公団が設立されたため、日本鉄道建設公団法の規定により同公団に引き継がれ、昭和39・9開業と同時に有償で国鉄に譲渡された。

また鶴川・宇出津間については、開業の際は新線建設の国鉄経営に及ぼす影響を考慮して、同区間に特別運賃が設定されたが、この特別運賃は昭和36・5・19限り廃止された。

(高橋昌保)

のむらやさぶろう 野村弥三郎 明治1・1・10京都府舞鶴に生まれ、同22年東京帝国大学法科を卒業して第三高等学校教授兼舎監となったが、同29年招かれて臨時北海道敷設部に入り、事務官となった。同30年同部の計理科長兼庶務課長に進み大いに実績をあげ、同39年同部が鉄道作業局に属して北海道出張所となるや、その所長に任ぜられ、同時に北海道炭礦鉄道株式会社の鉄道国有法による買収に活躍して手腕を認められた。



明治40年北海道鉄道管理局長となるに及び、自ら北門の鉄路王と号し、北海道鉄道のことは、みだりに本庁の干渉を許さずと豪語するなど、奇行をもって鳴った。

大正2年東京鉄道管理局、同4年西部鉄道管理局、同8年神戸鉄道管理局と各局長を歴任したが、神戸を最後に退官し、病を得て郷里に退隠して、ゆうゆう自適の生活を送り、昭和18・3・1京都府松ヶ崎村にせい去し、東京都多磨霊園に埋葬された。

(篠崎四郎)

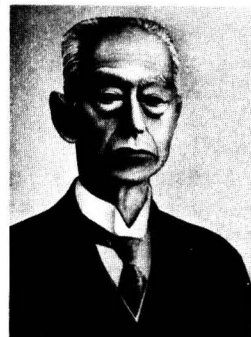
のむらりゅうたろう 野村龍太郎 安政6・1・25美濃国(岐阜県)大垣に生まる。幼名龍之助、明治5年上京、慶應義塾児童局(現幼稚園)に入り、のち東京外国語学校英語科に入学、同8年東京開成学校に転じ、明治10年東京開成学校と東京医学校を合併して東京大学となるや、同大学理学部土木工学科を専修、同14年卒業した。

卒業後は直ちに東京府土木課に勤務、明治19年原口 要に抜てきされて一等技手として鉄道局に就職、横浜・沼津間建設に従事、馬入川鉄橋架設工事を担当、こえて同21年甲武鉄道に入り、新宿・八王子間の建設を担当、翌年新宿・神田三崎町間の甲武鉄道市街線を実測した。

同23年鉄道技師奏任官四等に任ぜられ、関西方面の各私鉄の工事監査、翌年の濃尾大地震の復旧工事等に実績をあげた。

続いて奥羽線・中央線の建設に尽力し、同29年鉄道事業視察のため欧米へ派遣され、31年帰国して逓信技監となり、鉄道会議議員をおおせつけられた。

明治32年博士会推薦により工学博士を授与され、以来帝国



鉄道庁より鉄道院にかけて建設部長をつとめ、同42年鉄道院技監に任ぜられた。44年ロンドンの第6回シベリア經由国際旅客交通事務に関する会議委員を命ぜられ、大正2年鉄道院副総裁、運輸局長に任ぜられた。

次いで同年大正使参事官をおおせつけられ、鉄道部長となり、同12年南満州鉄道株式会社総裁に任命された。

晩年帝国鉄道協会会長(大正11年)および東京地下鉄道株式会社社長(大正13年)に推されたが、太平洋戦争中の昭和18・9・18せい去し、麻布長谷寺に葬られた。

参考文献 蓑洲会編 野村龍太郎伝。

(福田 一)